

甲元健雄先生を偲んで

船 木 満洲夫

甲元健雄先生は本年一月二十一日、七十四歳をもってご永眠になりました。十八日に北白川のパプテスト病院にご入院され、心電図等の検査の結果、二十日の晩に、翌日は退院してよいと言われて、非常に喜んでおられたとのことですが、二十一日午前ご容態急変のため、救急車で山科の病院へ移送の途中、心筋梗塞でお亡くなりになったのでした。私たちにとりまして、思いがけなくもはかないご逝去でありました。

甲元先生は明治四十四年一月二十九日、奈良県北葛城郡香芝町にお生まれになりました。浄土宗門とは縁が深く、御祖父真定師は知恩院で山下現有貌下にお仕えになったとうかがっています。先生は第三高等学校文科甲類を経て、京都帝国大学文学部英文学科を昭和十年にご卒業され、ひきつづき大学院に進まれました（教職を命ぜられて中途退学）。昭和十六年には第三高等学校教授にご就任されましたが、翌年に陸

軍司政官（マニラ日本語専門学校主任教授）として国外勤務を命ぜられ、二十年に大阪外事専門学校英語学科教授、二十五年に大阪外国語大学英語学科助教授、三十二年に同教授にご就任、四十二年三月にご退官になりました。その後は橘女子大学、京都産業大学の教授を勤められ、五十四年四月に佛教大学教授としてお迎えし、非常勤の期間を含めて七年近く、本学で研究と教育にご専念頂いたことになります。

先生のご専門はイギリス文芸批評で、特にJ・M・マリの批評に関してはわが国有数の研究者であります。マリはT・S・エリオットと対立したロマン主義の立場の批評家として知られています。甲元先生はマリの新ロマン主義の核心を抽出され、その真髓と宗教との関係を説明されるところに、マリの『文体の問題』について自己表現としての隱喩論の意義を、またマリの『キーツとシェイクスピア』については著者

の言う‘dying to life’の意義を論じられるなど、マリに關して先駆的な論文を多く發表しておられます。マリ夫人で短篇小説家のK・マンズフィールドについてもいくつかの論文を書いておられますが、マンズフィールドからマリへと進まれたというのが、先生のご研究の順序のようであります。お亡くなりになる一年前に刊行された『英文学概論』（あぼろん社）は、英國の自然と民族の特徴を踏まえながら、社会的、政治的背景の中で英文学の生成発展の道筋を詳述したものであります。

先生は京大の恩師・故石田憲次博士をこの上なく尊敬しておられました。この『英文学概論』も、石田博士の『英文学風土記』を読む場合の、一つの足がかりとなればとのご念願をもってまとめられたのでした。石田博士の学統を継がれた甲元先生のご研究には、精緻な学風が脈うっているように思っています。『英文学概論』は一般的な見方を根底にしながら、論述と取捨選択に先生独自の立場が反映しているように思います。ジョンソン博士の『英語辞典』をめぐるチェスタフィールド卿の態度について、卿宛の彼の有名な絶縁状の引用に紙面を割かれ、この辞書の‘Patron’の第一項‘……通例横柄な態度で後援してやって、その代償として追従をうける卑劣漢」をつけ加えておられるのは、先生がジョンソン博士の独立不羈の性格に、深く共鳴された表われでありましょう。

甲元先生の学生に対するご指導は厳しく懇切なものでし

た。授業を受けた学生が、ていねいで分かり易かったと思いつを話していました。ゼミの学生には、ご自宅周辺の略図を配って熱心に指導しておられました。また卒論の口頭試問でごいっしょしたとき、英文の訳し方について学生に細かく質問しておられたのを思い出します。不公平がお嫌いな先生は、どの学生にも同じように、時にはやさしく時には厳格に接するのを常としておられました。

先生には、どこかお育ちのよさ、円熟したお人からを感じさせるところがありました。一つの世界をおもちになって、世間一般とは距離を保っておられたように思います。何よりも歪んだことのお嫌いな先生でした。また華やかなこと、無理なことを避けられました。人のことはあれこれ言うが自分のことは不問に付する、そういう世俗とは無縁の先生でした。独特の謹厳な風貌のヘビー・スモーカーの先生が、いっしか煙草をおやめになったのは寂しいことでした。

今ではもう甲元先生のお姿に接することはできません。突然のことです。先生も、奥様やお子さんのことがお心残りであったことでしょう。でも先生の学問のあとを継がれたお嬢さんの洋子さんが、着々と業績をあげられていることが、先生にとっては大きなお慰めであったことと思えます。

甲元先生の御霊の安からんことをお祈り申し上げます。

（ふなき　ますお　文学部教授）